

特集:

キングルビー

富良野で徒然

日記書く

- 接ぎ木の実際
- 飛んでくるお客
- しみじみ考えた

CONTENTS:

メロン苗はこうしてできる	1-2
小さいほうの赤頭巾ちゃん	3
裏山散策と人口密度	3
日本の川を旅する	4
伝説のスピーチ	5
終わりに	6

皆さんいかがお過ごしでしょうか？今年も富良野通信の季節がやってきました。今年から始めたブログからご紹介します。

<http://furano-harmony.com>

メロンはすくすく元気です



3月12日に種まきをしたメロンは今こんな状態です。

25日ほど苗を育て本畑に移植します。

それから約一月でメロンの花が受粉します。これを「着果」と言います。

3~4個の玉を付けさせますが、卵大の頃に摘果と言って余分な玉を除きます。

当地では通常一株に2本の蔓を這わせ、一蔓に2個のメロンを付けます。つまり一株で4玉収穫します。

もっとも全てが狙い通りの玉になるわけではありません。

メロンの中でも比較的大玉に育つ品種ですが、気候や水分温度条件で左右されやすいとてもデリケートなメロ

ンです。



これは以前パンフレット用に撮影したメロンですが、この位の大きさ、ネット張りが理想であり、目標です。

一玉当たり約2.5kgの大玉です。

まずは種まきから・・・接ぎ木って？



育苗箱と言います。我が家では9列×9で81の種を栽培ロットごとに5箱程度蒔いて行きます。

種といってもメロンの苗を仕立てるのには一つの苗に2粒の種を蒔きます。

実際にメロンの果実を成らすキングルビーの種、これ

を「穂木」と言います。

そしてその穂木メロンの土台となるメロンを台木と言います。

台木の根っこでキングルビーを育てていくということです。

何故接ぎ木をする必要があるのでしょうか？

実際にメロンを成らす品種のメロンの種は交配を重ねておいしいメロンが成る種です。品種が出来上がってから数年から数十年たっています。その間農業生産の現場では新種や対抗性を高め

た病気などが出現してきました。

台木メロンとはその病気に掛からない、かかりづらい性格をもったメロンです。この台木メロンに実を成らすメロンを接ぐことで病気に対応するためにこの作業を行うのです。

病気には殺菌剤と呼ばれる「農薬」を使うこともあります。しかし、農薬では治らない、発病したら手の施しようがない病気の一つに「つる割れ病」があります。この病気にかけられない対策が接木なのです。

接ぎ木の実際



育苗箱が二つ並んでいま
す。左が台木、右がキング
ルビーです。

まず台木に上から斜めに三
分の二ほど切り込みを入れ
ます。



次に穂木のキングルビーを
葉の向きを 90 度ずらして下
から同じ角度同じ深さで切り
込みを入れます。

台木と穂木を噛み合わせ専
用のバンドで押さえます。



“台木メロンに実を成らす
メロンを接ぐことで病気に
対応するためにこの作業
を行うのです。”

メロン苗の完成



予め保温して置いたポットに
植え込みます。

この段階で二つの根で生き
ています。なるべく接合部分
を広くするため互いに斜め
に切り込んだ部分でつなが

っています。



このまま一週間。

穂木側の茎を切断し、台木
の根っこで育つ苗の完成で
す。



春耕作開始！！



4 月初めの苗の状態です。

三月上旬からトラクターに付
けた「投雪器」で雪を飛ばし
てハウスにビニールをかけ
てゆきます。

ビニールを貼り中の雪が解
け、土が乾いたら肥料を撒
きトラクターで耕運します。

今まで冬眠していた土が日

差しを受けて水蒸気が沸き
上がってきます。



小さいほうの赤頭巾ちゃん



アカゲラ（キツツキ科）中型のキツツキ。山地の林に留鳥としてすみ、木の幹に縦にとまりクチバシでつついてカミキリムシの幼虫などをあさる。北海道では小さくて頭頂全部が赤く下腹部が白い「コアカゲラ」がいる。◎分布 北海道～本州 ○全長 約 23.5cm

小さいほうの赤頭巾ちゃんって？

大きいほうの赤頭巾ちゃんとは「くまげら」（富良野市の市の鳥）です。山に入り運が良ければ見ることができます。それもかなり高い確率で。飛ぶ姿は「カラス」ほどあります。残念ながら映像がありません。チャンスがあったら撮影してきます。

今回は小さいほうの「アカゲラ」です。

今年は山からやってくる野鳥が少なく、昨日までは「スズメ」と「ヒヨドリ」そして「カケス」くらいなもので、例年なら「アカゲラ」のほか「コガラ」

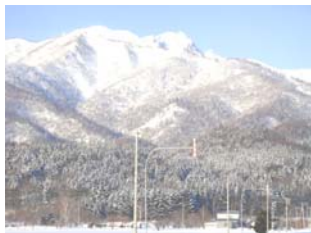
「ヒガラ」「シジュウカラ」「ゴジュウカラ」「ヤマゲラ」などは常連さんだったのですが。

今年は雪が少なく気温も高めだからでしょうか。ちっとさみしい気がします。野鳥に餌をあげることに専門家は良いことではないとしているみたいですが、ついあげてしまいます。



下向いて赤頭巾が見えちゃいました

裏山散策と人口密度



芦別岳山頂付近、今日はここまでくっきりすっきり、寒さを忘れる眺めです。山のふもとは常緑林、つまり葉が落ちず常に緑の葉をつけている「松」類です。具体的にはこの標高だと「トドマツ」が主です。北海道に天然生育する松の中で一番多い松類です。最近はあまり寒くならないですがマイナス30度く

らいになると幹の水分が凍結して膨張、幹が縦割れを起こす「凍裂」という現象が起きます。まだ暗い内に森の中「カーン」と「キーン」の間くらいの音がこだまします。

富良野の話をし。富良野市の面積は600k㎡、人口24,600。これを人口密度で比較すると面白いですよ。富良野市は1k㎡当たり41人です。つまり一キロ×一キロmの四角に41人しか住んでいません。北海道全体では67人、じゃ東京都は？なんと5900人も住ん

でいる。ちなみに大阪市では11,895人だそうです。この数字どう取るか、どう考えるかはあなた次第。差し障りのないところで富良野は寂しいけど静か、水や空気はうまいけど不便と云ったところでしょうか。



常連のお客様 カケスくん

“富良野市は1k㎡当たり41人。
東京都は？
なんと5900人も住んでいる。”

日本の川を旅する



一冊の本をご紹介します。初版が昭和57年4月と記されているから西暦で1982年。いやはや27年も前の本である。著者を知るきっかけは以前お話ししたアウトドア雑誌「ビーパル」だ。現在もカヌールポ「のんびり行こうぜ」は人気の連載。

その野田さんが昭和の50年代に日本の川14本を単独漕ぎ下るツポルタージュ。

北は北海道・釧路川から南は鹿児島・川内川まで。経済高度成長時の汚泥排水路と化した川を嘆き、ある時は流域で生活する人々とのふれあいに心なごむ旅。この本の解説文を書いている作家「椎名誠」兄いも「実に文章のうまい人だなア」と言わしめたほど、その文章は読者を引き付けて離さない魅力を持っている。汚染程度や河川改修などで現在の川の様相とは違う面があるかもしれないが、その当時こんな思いで川を自然を人々の暮らしを見つめ書き残してくれた野田さんを味わってほしい。

そして野田さん流の現在も変わらない自然への接し方、やさしく人々を見守る眼差しを感じてほしい。

「アユをブツ切りにしてフキと一緒に味噌汁を作る。ご

飯を炊き、吹き上がったハンゴウの中に三匹のアユを頭を上にしてつつこむ。蒸した後、アユの頭を引っ張ると身がとれて骨だけ抜ける。シヨウユを入れてかき回し、アユ飯だ」(長良川)

「確かに川旅は”男の世界”である。自分の腕を信頼して毎日何度か危険を冒し少々シンドクで、孤独で、いつも野の風と光の中で生き、絶えず少年のように胸をときめかせ、海賊のように自由で……」(釧路川)

「春の小川に行く。スマレの群落が岸を彩り、フジの花が川の上に垂れている。春先にこのような小さな流れを漕ぐのはカヌーの楽しみの一つだ。フネの上から手をのばして花を摘み、ツクシを採りつつ下る」(江の川)

椎名誠兄貴とのやり取りも心に残る

野田さんは川の中に潜りいろんな魚を手づかみで採ってくる。椎名誠兄いはダイビングの経験があるので、つい「スキューバーでやったらもっと楽にできますね。」と馬鹿な質問をしてしまったと語る。すると野田さんはあきらかに兄いをすこしケイバツした顔つきで、「エアタンクでやるとせいぜい一日2時間くらいしか潜れないでしょう。僕は一日中潜っていたいんです。それに魚を採るときはこちらも生きものとして対等にいきたいと思うんです

ね。」と返されたそうです。

野田さんはきわめて正確な英語を話し世界のあちこちを放浪し、かなり壮絶な冒険をしているがそのことはほとんど言わない。

椎名誠兄いは解説の中でこう締めくくる。

野田知佑は川の上に行く風である。日本で数少ない自由に生きていける”風の男”である。しかしこの自由は実は大きなリスクを背負った上での自由なのでもある。そのリスクとは「死」だ。野田さ

んの自由な川旅はまた「突然の死」と隣り合わせの自由でもあるのだ。一年前(解説文当時)、ユーコン河に出かけていく野田さんと別れるとき、僕は彼と握手をしながら「行ってらっしゃい、死なないで下さい」と言った。それは本気で言った言葉だった。野田さんはその時黙って笑わない顔でうなずいた。川の上に行く自由な風の男はあきらかにこれから勝負してくる、という顔をしていた。それもまたいつもとはすこし違ういい顔であった。

“おれの理想は、持ち物はすべてバックパックの中に入るだけにして、風のように自由に好きなところに移動して暮らすことだ。家も机も女も、みんな小さく折りたたんで邪魔にならたら惜しげもなくポイと捨てなければいけない。男は常に身一つで生きるべきである。そうなのである。――”

“30歳を過ぎた大人には、少年になにかを伝える義務がある。”

私の世代には、夢があります

セヴァン・カリス＝スズキ

セヴァン・カリス＝スズキ、という女性ご存じですか。

自然が好きで自然にできるだけ近い距離で働き暮らして生きたいと願い、選んで農家になりました。都会にいるときから「開発」の名のもとに山は削られ、川岸はコンクリートで固められ、流域から流れ出る化学物質で汚されてきたことに憤りを覚えていた。文明の恩恵を受けながらの自分勝手な理念…偽善的な自然崇拜とでも言えますか…そんな感覚で生きてきた自分です。

いつしか身の回りの自然が当たり前になり、太陽が出て地表を暖め風が気温を均して雲が雨を運んでくれる有難味を忘れました。そんな

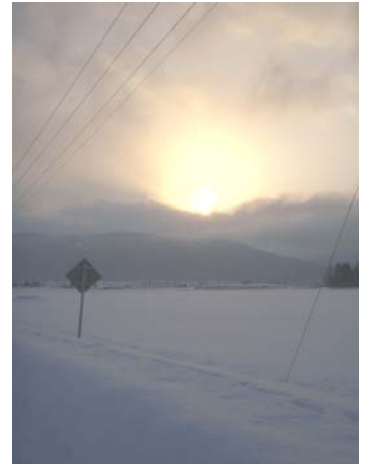
折ある講演で「リオの伝説のスピーチ」セヴァン・カリス＝スズキ女史を知りました。

1992年、ブラジル、リオデジャネイロで開催された環境サミットに、12歳で子供の環境団体の代表として参加し、伝説と言われるスピーチを行ったことで知られる世界的な環境運動家だ。

「…(略)私の世代には、夢があります。いつか野生の動物たちの群れや、たくさんの鳥や蝶が舞うジャングルを見ることです。でも、私の子どもたちの世代は、もうそんな夢をもつこともできなくなるのではないかとあなたがたは、私ぐらいの時の時に、そんなことを心配したこ

とがありますか。(略)

ここでは、あなたがたは政府とか企業とか団体とかの代表でしょう。あるいは、報道関係者が政治家かもしれない。でもほんとうは、あなたがたもだれかの母親であり、父親であり、姉妹であり、兄弟であり、おばであり、おじなんです。そしてあなたがたのだけれども、だれかの子どもなんです。私はまだ子どもですが、ここにいる私たちみんなが同じ大きな家族の一員であることを知っています。そうです50億以上の人間からなる大家族。いいえ、実は3千万種類の生物からなる大家族です。…(略)」



厳冬の夜明け

いのち

大漁 金子みすゞ

朝焼小焼だ

大漁だ

大羽鰯の

大漁だ。

濱は祭りの

やうだけど

海のなかでは

何萬の

鰯のとむらひ

するだらう。

※鰯＝鰯(イワシ)

人やより大きな生きものたちの大事な糧となるイワシもその一尾一尾に「命」がある。

大正時代の童謡詩人・金子みすゞはその小さなひとつひとつの「命」に目を向けました。

「アイヌの里ニ風谷に生きて」萱野茂著 北海道新聞社刊 より引用

アイヌの狩人たちは、山でシカを獲った場合も肉の全部を採り帰らずに、キツネの分は雪の上へ、カラスの分は木の枝に掛けるというふうに、肉の一部と内臓は残してくるよう心掛けます。それはシカの動きを教えるのがカラスとカケスだからです。狩りに山へ行き、沢の向かい側の林の上にカラスあるいはカケスが舞うというか巡回していると、その下には必ず何かがいるからです。したがって、獲物を探す狩人にとっては、それら鳥

の動きが大きな目安になったわけですから、お礼のしるしに肉を置いてくることを忘れませんでした。アイヌ民族は、すべての生物が物を分け合って食べようという気持ちが常にあるのです。したがって、遠くに見える山、近くを流れる川、沢など、これらの自然はアイヌにとっては神様であったのです。山も木も川もみんな神様です。なぜそれを神様と考えたのか。それは自然全体、山も川も沢も、これらはいつも新鮮な食料を供給してくれる食料貯蔵庫であったのです。ということは、川があるから魚がいる。木がはえているからシカがいる、そこへ行って食べ物をちょうだいしてくるという謙虚な心をつねづね持っていました。このように自然を神と崇め、豊富にある物といえども乱獲を慎み、それによって神＝自然とアイヌの間に相互信頼が確立していたのです。

“すべての生物が物を分け合って食べようという気持ちが常にあるのです。”

何萬の
鰯のとむらひ
するだらう。

〒079-1571
北海道富良野市
山部西18線18番地

TEL:
0167-42-2187

FAX:
0167-42-2187

E-MAIL:
farm@furano-harmony.com

farm Web URL:
www.furano-harmony.com
ファームブログ
「ふらの徒然日記」は
ホームページから
お入りください。

「リオの伝説のスピーチ」

お金があればいつでも欲しいものがすぐに手に入り、欲しかったものを手にした喜びも薄れていき、ほしいものは何かまで人任せにしてそれが便利で豊かな暮らしと思うようになる。私も含めてその価値観をすこしばかり考え直してみよう。

企業は「消費者のニーズ」と

謳い消費者が考えも及ばない仕組みを作り出し、どんどんものを作りだしてどんどんものを売る。たくさん売れるようにするには、たくさん作りたくさん運び、安く売る。

数十年あるいは数百年作り続けられ続けた名品はどんどん姿を消して行き、どんどん買い換えることが皆が潤

う経済システムとされた。ロンドンのタクシーに見られた「変えない、変えようとしないうを価値とする」精神に心、動きます。

なにもロンドンまで思いを馳せなくとも私たち民族の先駆者、アイヌの人たちの素晴らしい精神に学ぶとしよう。

戦うオヤジの応援団 ～ 入団いたしました

この度晴れて応援団に入団させて頂きました。メンバー一名は「SKYPIG」。そうその名は「空を駆ける豚」、一番好きなギタリスト「Duane Allman」に因ませてもらった。まるで大空を駆けまわる犬のように自由に大らかで

リズムカルに跳ねまわる「スライドギター」がファンの心をつかんだ。デュアン・オールマンは「SKYDOG」と称された。おまえは「DOG」ではないだろう、どう見たって「PIG」だろうと・・・自他共に認めるところでもありそのネ

ームにさせて頂いた。

戦うオヤジの応援団
Acoustic Guitar Local
Network

<http://tatakauoyaji.com>

ファーム概要

私ども夫婦二人とも東京出身のいわゆる「平成の屯田兵」。北海道にあこがれ、農業をしたいと、のこの富良野にやってきたのは、'92年の春でした。2年半ほど土地を探し、ようやくここ山部に土地を見つけて、クワを

入れはじめたのです。土地のベテラン方に親切にしてください、曲がりなりにも「農家」の一員に加えさせて頂きました。農業情勢は厳しい昨今ですが、何とかこの農業で生きていきたいと考えています。農業経験の

浅い人間ですが、その分慣行農法に対するコダワリとか、執着心みたいな物はぜんぜんなく、いちばん自然とともに生きていかなければならない農業者として、自然と「調和」させた農業を目指しています。

富良野ハーモニーファーム

若林 一仁・えみこ・

森里

